

平成 29 年度

グローバルプロジェクト中間報告書

国立大学法人 小樽商科大学

【本件に関するお問い合わせ先】  
小樽商科大学企画戦略課地域連携戦略係  
TEL: 0134-27-5234  
E-Mail: cocjimu@office.otaru-uc.ac.jp

## ●平成29年度 グローカルプロジェクト中間報告書 目次

- ・ 小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト 江頭 進 …… 1
- ・ 地域活性におけるふるさと納税の検討 二村 雅子 …… 2
- ・ 外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト 井上 典子 …… 3
- ・ 地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」 李 濟民 …… 4
- ・ 地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性 原口 和也 …… 5
- ・ 小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化 小山田 健 …… 6
- ・ 北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化 高野 宏康 …… 7
- ・ Lost in Translation? 倶知安・ニセコにおける増加する定住外国人と外国人観光客に対する「医療サービス」の課題とその克服 — 外国人患者のための「手引き」や共通「問診票」(日本語・英語)作成を含めた解決策提案も視野に入れて 佐々木 香織 …… 8
- ・ ローカル・ナショナル・グローバル企業群の経営分析 篠本 智之 …… 9

# 小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト

プロジェクト代表者: 江頭 進

## 1. プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、小樽市に存在する歴史的建造物を保存・活用するためのクラウドファンディング(以下、CF)による資金調達システムをPRし、支援者層を形成するためのプロジェクトである。

小樽市内に存在する歴史的建造物は町の景観を構成し、また観光や教育の資源となっているという点で公共財的性格を持っている。その反面、それらの歴史的建造物は、個人所有のものが多く、莫大な維持管理費用はすべて所有者個人が負担しており、それに耐えきれず取り壊される建築物も少なくない。本プロジェクトは小樽市民の公共財である歴史的建造物の保存・活用の費用を広く市民に負担してもらうためのCFのPRを行うためのパンフレットを作成するものである。

他方で、歴史的建造物を保存・活用するためには莫大な費用が必要であり、小樽市民とその関係者だけでは十分な資金を用意できない。そこで小樽を訪れる国内外からの観光客に対して、本CFの意義を説明し、小樽ファンを形成し、固定的な寄付者層の形成をめざすものである。

## 2. プロジェクトの進捗状況について (～H29.10)

パンフレットは市民、日本人観光客向けの日本語版と外国人観光客向けの英語、中国語版を作成する予定である。平成29年7月には、日本語版がほぼ完成した。

9月5日にはゼミ生がMatching Hub 小樽に参加し、CFに関するブースを出展している。

パンフレットの作成と同時に、CFの第一号案件として、小樽市が所有する旧寿原邸の庭園修復工事を選び、管理者である小樽市建設部と打ち合わせを重ねていた。両者の細かい擦り合わせをほぼ終えて、後は契約とパンフレット用の旧寿原邸の写真撮影するだけというところまでこぎ着けていたが、10月末に突如小樽市より、「これまでの話はなかったことにしたい」と連絡を受けた。理由の説明を求めたが「時期尚早」と言われ単に謝罪を繰り返されるだけで、旧寿原邸庭園工事の案件は中止となった。

そこで、すぐに第一号案件として、今冬の歴史的建造物の雪下ろし費用の支援に切り替え、日本語版パンフレットのデザインを完成した。



## 3. 今後の取組予定について

現在は、英語版、中国語版のパンフレットのデザインを作成中であり、12月には完成・市内観光案内所などで配布予定である。CF本体(<http://www.ega-o.org/cf/>)は、決済会社の選定がクレジットカード会社の審査がCFに対して厳しくなっていることもあり難航したが10月になってCoiny株式会社に決定した。



現在、市内の歴史的建造物の複数の所有者に声を掛けているところであるが、本年度の降雪の状況がまだ未確定なので、具体的な案件が決まっていない。これも12月中には見通しを立てる予定である。

# 地域活性におけるふるさと納税の検討

## プロジェクト代表者: 二村 雅子

### 1. プロジェクトの目的・概要

#### 目的

最近、「ふるさと納税」という言葉がニュースや新聞で賑わっている。その理由は、寄附を受ける自治体が返礼品を渡す仕組みが納税者に受けていると考えられる。「ふるさと納税」の仕組みの是非も重要であるが、少なくとも農作物や海産物が豊富である北海道地域で恩恵を受けた地域は存在している。

北海道の地域活性化について、「ふるさと納税」を1つの素材として、学生自身が、問題について、自ら論理立てて考えることができるようになることを目指す。

#### 概要

以下3点について取り組む。

1. 従来の地方自治体の税収の仕組みとふるさと納税という寄附の仕組みの違いを理解する。
2. ふるさと納税が地域経済活性化にどのように役立つのかについて検討する。
3. 学生とともに東川町へインタビュー調査を実施する。

(東川町は、政策的に優れた仕組みで成功している自治体として「ふるさと未来大賞」を受賞しており、調査対象として適切であると考えた。)

### 2. プロジェクトの進捗状況について (～H29.10)

1. 従来の地方自治体の税収の仕組みとふるさと納税という寄附の仕組みの違いを理解する。

地方自治体の税収の仕組みについて、財務局の方から参考文献を提示頂き、輪読を行った。ふるさと納税について、HPなどを参照して理解を深めた。

2. ふるさと納税が地域経済活性化にどのように役立つのかについて検討する。

ふるさと納税が地域経済活性化に役立つという大きな仮説の中で、どのようなことが要因になるのか、逆に問題点としてどのようなことが考えられるかを検討し、その上で質問項目を作成した。質問項目を作成した後、財務局の方からアドバイスを受けた。

3. 学生とともに東川町へインタビュー調査を実施する。

2017年10月18日から19日に東川町を訪問した。19日の9時30分から長原淳副町長と面談をした後、12時過ぎまで、担当者の方へ質問を行った(企画総務課課長菊池伸氏, 企画総務課写真文化首都創生室主事柳澤奨一郎氏, 企画総務課地域おこし協力隊和田北斗氏)。

学部3年生という早い段階から、地域経済に関して検討をすること、現地へ行くための予定をたてること、実際に現地へ行き社会人の方へインタビューをすることで、学生の問題意識および動機づけを高めることができた。訪問後、「ふるさと納税が地域経済活性化に役立つ」という大きな仮説のもと調査にいったが、東川町は人口増加地域であるということも考慮すると、「町政が元々良いという素地のなかで、ふるさと納税は経済活性化の面で良いという要因の1つではないか」と仮説の再考を行い、東川町へ再度質問票を作成するなど学生達は能動的に行動できている。

### 3. 今後の取組予定について

小樽商科大学ゼミナール協議会において主催される2017年12月14日に開催予定の「インナーゼミナール大会」に、「東川町の町づくり(仮)」という題目で参加し、これまでの成果を報告する予定である。

# 外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト

プロジェクト代表者: 井上 典子

## 1. プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、小樽市の依頼により、本学学生の学習活動の一環として、小樽の美味しいお魚と魚料理、魚をテーマとしたイベントなどを外国人観光客にわかりやすく紹介する英語版リーフレットを作成するものである。

プロジェクトの目的として、①学生が小樽市の水産や観光担当職員、民間の関連事業者などと連携し、小樽市の古くからの主要産業である水産業への知識と理解を深めながら英語運用能力の向上を図ること。②小樽は海鮮料理が有名だが、これまで小樽のお魚にスポットを当てた外国人向けのリーフレットは作成された例がなく、食と産業の面から小樽観光の魅力について増加を続ける外国人観光客に発信することで消費効果を高めること。③学生は自分たちが作成したリーフレットが外国人観光客に使われ、小樽の観光振興に寄与することで大きな達成感を得ることができ、今後の学習意欲向上や就職活動にも良い影響を与えること、が挙げられる。

## 2. プロジェクトの進捗状況について（～H29.10）

2017年5月1日:小樽市役所を訪問し、中野産業港湾部長から正式に本プロジェクトの依頼を受けるとともに、協力者と必要性、事業内容について打ち合わせを行った。

6月:本プロジェクトの関心を持つ学生を募り、プロジェクトチームを編成し、リーダー・サブリーダーを決定するとともにプロジェクトの概要を周知した。

7月:小樽市水産課が事務局を務める小樽のおさかな普及推進委員会の日本語チラシやホームページなどを参考にして大まかな構成を決定する。

8月～9月:必要な現地調査を繰り返し行う。小樽運河および駅周辺にて外国人観光客に対しアンケート調査を行う。

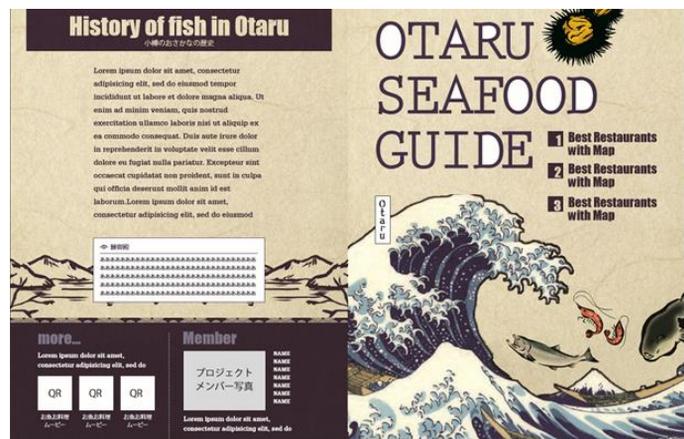
10月:調査内容などを整理し、協力者の監修を受けながらリーフレットに載せる内容とレイアウトの決定、日本語版の作成を開始する。同時に、小樽の魚を紹介する動画および観光客のマナーに関する英語の動画撮影を行う。

10月末:協力者なども参加して中間発表。日本語版に対するフィードバックを頂く。

現在、中間発表のフィードバックを反映し、さらに取材を重ねながら日本語版を完成すべく活動している。

## 3. 今後の取組予定について

- ① 11月末までに日本語版を完成させる。
- ② 英語への翻訳作業を開始。随時、協力者の監修を受けながら、校正作業を行い、英語最終版を完成させる。また平行して、動画の編集作業を行う。1月末完成を目指す。
- ③ 完成品を印刷し、小樽市政記者クラブで発表を行う。
- ④ 完成品を市内外の観光案内所に置いてもらうとともに市外観光キャンペーンや物産展で活用してもらう。



# 地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」

プロジェクト代表者：李 濟民

## 1. プロジェクトの目的・概要

近年のビジネスの現場では文系・理系の括りでは解消できない様々な課題が山積しています。「ものづくり目利き塾」は、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業として、小樽商科大学と室蘭工業大学が共催し、8月と9月の計4日間にわたって、文理の学生が垣根を超えて共に学び、将来、北海道経済・世界経済で活躍する「理系の現場・技術を知る文系人材」「文系の知見・考え方で発想できる理系人材」の育成を目指す取り組みです。

## 2. プロジェクトの進捗状況について（～H29.10）

室蘭と小樽合計4日間で開催し、両大学あわせて18名の学生が参加し、学習を行いました。8月に開催された前半の2日間では、小樽商大生が室蘭工業大学ものづくり基盤センターを訪問、清水ゼミの学生らとともに、材料強度や鋳造といったものづくりの基礎と実習体験、企業見学(日本製鋼所 室蘭製作所)を行いました。

9月の後半2日間では、室蘭工大生が小樽商科大学を訪問、市原ゼミの学生とともに、ものづくり企業の企業評価、グループワークによる事例研究、企業見学(北海製罐、光合金製作所)を行いました。

【開催地：室蘭】

第1回		【1日目】8月9日(水)	【2日目】8月10日(木)
午前	9:30~9:45	開講式	9:00~11:30 実習(鋳造(鉄))
	9:45~10:00	安全講習	
	10:00~10:30	講義(ものづくりの歴史)	
	10:40~12:40	講義(材料強度) 実習「グループワーク」製作	
休憩	12:40~13:40	昼休憩	11:30~12:00 まとめ
午後	13:40~14:40	講義(材料強度) 実習「グループワーク」実験	12:00~13:00 昼休憩
	15:00~17:00	実習(鋳造(鉄))	13:00~16:00 工場見学 日本製鋼所室蘭製作所



【開催地：小樽】

第2回		【1日目】9月19日(火)	【2日目】9月20日(水)
午前	9:30~12:00	「ディレクターと企業評価」 講義(決算書の読み方・ 財務分析の基礎) ケーススタディ 適切な情報開示の必要性・ 重要性について理解	9:00~13:30 事例研究(グループワーク) 技術分析と財務諸表分析 企業価値の評価 ディレクターへの検証評価
		12:00~13:00 昼休憩	
午後	13:00~16:30	工場見学 ①北海製罐 ②光合金製作所	13:30~15:00 アレクサンダー・質疑応答 15:00~15:30 閉講式



北海道新聞による、小樽商科大学講義の報道

理系学生にビジネス感覚を  
小樽商大で監 室工大生 決算書読む



## 3. 今後の取組予定について

両大学生への受講アンケートでも、講義で取り上げたテーマに対する興味・関心が高まったとの意見が多く、連携による学習効果は高かったと考えます。この取り組みの効果を検証するには複数年で実施する必要があると考えています。

市原ゼミのWeb-Siteで情報発信をしていますのでご覧ください！

<http://cac-tus.wixsite.com/cactus>



# 地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性

プロジェクト代表者: 原口 和也

## 1. プロジェクトの目的・概要

情報の発信には様々な媒体が用いられるが、その1つとしてパズルアプリを用いることができないか、実証を通じて検討する。すなわち、情報の種類によっては、パズルで遊ぶことを通じて効果的に伝達できないかを問うのである。このプロジェクトでは題材として小樽および周辺地域の地名やスポット名にフォーカスし、地域のキーワードを散りばめた「ご当地スケルトンパズル」で遊べるアプリを開発し、リリースする。得られたフィードバックを元に、例えばどのような情報を、どういったパズルで発信するのが効果的なのかなど、今後の展開に必要な知見を取りまとめる。

## 2. プロジェクトの進捗状況について（～H29.10）

ご当地スケルトンパズルで遊ぶことのできるアプリ「オタルトンパズル」を開発した。スケルトンパズルとは、白黒に塗られた盤面とキーワードのリストが解答者に与えられ、すべてのキーワードをスロット(縦もしくは横に連なる白マスの極大区間)に割り当ててことを問うパズルである。このアプリの最大の特徴は、小樽地域のキーワードを用いたスケルトンパズルで遊べることにある。キーワードの由来に関する簡単な説明を見ることもでき、地域学習への活用も期待される。なおパズルインスタンスの生成には、これまでの研究を通じて開発してきた最適化プログラムを用いた。

またもう1つ、ゼミ指導を通じて、小樽に関するクイズアプリ「たるあるき」を学生に開発してもらった。

両アプリとも、Apple社のApp Store、もしくはGoogle社のGoogle Playから無償でダウンロード可能である。また風景画像の使用など、小樽観光協会の協力を得ている。



**たるあるき**  
(小樽に関するクイズアプリ)

**オタルトンパズル**  
(小樽地域のキーワードを用いた  
スケルトンパズル)

## 3. 今後の取組予定について

小樽観光協会が主催する冬のロングランイベント「小樽ゆき物語」において、上記アプリを用いた景品交換イベントを実施する(12月17日を予定)。イベント中にアンケートを実施し、地域学習の手法として有効か、当該アプリによって人の流れに影響を与えることができるか、新しい観光イベントにつなげることができないかなど、ご当地アプリの可能性について様々な観点から調査と検討を行う。

# 小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化 プロジェクト代表者：小山田 健（プロジェクトリーダー：高野 宏康）

## 1. プロジェクトの目的・概要

### ●プロジェクトの目的

小樽・後志地域では、多様で奥深い歴史文化が展開していますが、担い手たちは高齢化などにより年々減少し、記憶の風化が進んでいます。本プロジェクトの目的は、小樽・後志地域の人たちのヒューマンストーリーを調査・記録し、地域資源および地域志向型授業での教育に活用することです。

### ●具体的な事業

学生が小樽・後志の地域の特徴、取材方法、記事のまとめ方を学んだ上で、同地域の昭和30～40年代の歴史・社会・風俗・文化などに詳しい方にインタビューして、記事にまとめます。その成果にもとづき、インタビュー集の発行、座談会の開催、Webサイト等による情報発信を実施し、着地型・交流型観光コンテンツ等の地域資源としての活用をめざします。本年度は、①記事のクオリティ向上のため、取材方法、記事のまとめ方等の指導を改善しました。また、②公開座談会では手宮地区を対象とし、町会・商店街等にご協力をいただき、より地域に密着したイベントになるように工夫しました。

## 2. プロジェクトの進捗状況について（～H29.11）

### ①地域情報の学習および取材方法・記事のまとめ方の修得（採択後～平成29年7月）

授業（総合科目「グローバルズムと地域経済」）内で、小樽・後志地域の歴史文化および社会経済の特徴、取材方法、記事のまとめ方についての講義および、小樽市内バスツアーによるフィールドワークにより、地域社会に対する理解を深め、取材と記事作成方法を習得しました。

### ②インタビュー実施と記事作成（平成29年6月～7月）

歴史文化やまちづくりに詳しい方（23人）に、学生が各3～4名のチームでインタビューを実施。1500字程度の記事を作成しました。インタビュー先と綿密にやり取りを行う等、記事クオリティ向上を図りました。



取材の様子（樽石にて）

### ③ゲスト講師の講演会&ディスカッション

ゲスト講師（渡邊英彦氏・富士宮焼きそば学会会長）を招聘、食を通じた地域活性化についての講演および学生との質疑応答を実施しました（5/31）。



手宮での公開座談会（11/14） ゲスト講師の講演（渡邊英彦氏、5/31）



### ④インタビュー先と学生の公開座談会（平成29年11月14日、会場：おたる千成）

手宮地区のインタビュー先4名、同地区の住民1名と、手宮でインタビューした学生等により、手宮の歴史文化とまちづくりをテーマに公開座談会を実施し、授業成果の情報発信、地元住民との密接な交流を行いました。定員60名のところ95名の参加者があり、盛会となりました。パネラー、学生、参加者の活発な意見交換が行われました。（公開座談会「小樽のひとに学ぶ～手宮の歴史文化とまちづくり～」）。

## 3. 今後の取組予定について

### ●インタビューと座談会をまとめた冊子発行（平成30年2月、1000部）

インタビュー記事23人分および公開座談会を収録した冊子を発行します。小樽市内各所での配布、および関連施設（市立小樽図書館、小樽観光協会等）へ設置し、地域資源として活用できるようにします。昨年度より記事内容のクオリティ向上を目指します。

# 北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化

プロジェクト代表者: 高野 宏康

## 1. プロジェクトの目的・概要

### ●プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、北海道の発展に重要な役割を果たした北前船の調査研究を通じて、その歴史的価値の地域観光資源化を推進し、新たな広域連携・観光ルートを開発することです。本年度は小樽・後志に加え、道内各地の北前船の歴史的関係を調査研究により明らかにし、講演、イベントなどでの情報発信、ツアー等により北前船の歴史的価値を活用した広域観光事業を推進します。

### ●本年度の事業内容

- ①北海道と北前船の関連文化財の調査研究(小樽、後志に加え、札幌、道南、北方四島)。
- ②北前船日本遺産登録推進協議会、学会、各地の地域振興団体に協力・情報提供を行います。
- ③講演、各種メディア等への情報発信により、地域観光資源としての定着化を目指します。
- ④地域志向型教育プログラムに成果を組込み、北海道の地域観光資源としての北前船の認知度向上と定着化を推進します。

## 2. プロジェクトの進捗状況について (～H29.10)

### ●調査研究

- ①小樽倉庫の創設者、西谷庄八および西谷家の事業に関する新出資料を多数発見しました。旧西谷邸(石川県加賀市橋立町)の未調査資料を加賀市と連携して調査を実施しました。(西谷海運の社史等を含む小樽および道内での西谷家の事業関連資料数千点以上)
- ②道内(余市、寿都、厚田、札幌)、択捉島で北前船関連文化財の調査を実施しました。ヨイチ場所産のイナウ、寿都・橋本家の系図確認、厚田の船絵馬の発見、札幌の軟石について(辻石材工業)、択捉島の北洋漁業工場跡地について等、新たな知見が得られました。

### ●情報提供・協力による地域観光資源化

- ①北前船日本遺産登録推進協議会、北前船日本遺産追加認定を目指す小樽市に小樽の北前船関連文化財について情報提供などの協力をしました。小樽市の追加認定申請にあたって、本研究プロジェクトによる調査研究成果、地資源化の取り組みが実績・成果として位置づけられました。
- ②HBC北前船子ども調査団事業に協力しました。小樽でのワークショップ、ガイドツアー(6/17)、全国の北前船寄港地(6自治体)が小樽に集まって開催した北前船子どもサミット(8/7-9)、まっふる特別編集「北前船子ども調査団」(ガイドブック)に、監修・コメンテーター等で全面的に協力しました。



西谷家資料調査(11/6-8)

### ●情報発信による地域観光資源化

- ①北前船と北海道について各種地域メディアに寄稿しました。(小樽商工会議所会報、BYWAY後志、小樽チャンネルMagazine)
- ②講演、シンポジウム、ラジオ、新聞等を通じ情報発信を行い、歴史的価値、地域資源化等を道内各地に紹介しました(17件)。



北前船と銀行 日本遺産シンポジウム(5/27)



日本遺産シンポジウム(8/19)

## 3. 今後の取組予定について

- 調査研究: 西谷家資料の調査研究・情報発信を中心に進めます。
- 情報発信: 北前船日本遺産についての認知度向上、雪あかりの路期間中に開催するイベントへの協力などを予定しています。

まっふる『北前船子ども調査団』



## プロジェクト代表者: 佐々木 香織

### 1. プロジェクトの目的・概要

俱知安・ニセコ地域では外国人居住者と観光客が急増しており、その対応が喫緊の課題である。現下、教育や行政サービスは適応し始めているが、医療サービスは未知数だ。マイノリティを抱える地域における医療は、言語の差異ばかりでなく、身体・疾病観や医療制度といった文化・社会的差異にも起因し、いわゆる*lost in translation*が起こりがちである。その結果、診察や治療が滞ったり、患者が不必要な不安に陥ったりしやすい。その為、ロンドンなどの国際都市では、その対策を始めて久しい。本プロジェクトは、ゼミ生を中心とし、この問題にまつわる『地域の課題』を社会調査(質問紙、聞き取り)により追究し、その『解決策』の提案を行うことを目的とする。具体的には、外国人と日本人医師・看護師の*lost in translation*を防ぐような日本語と英語での「手引き」や「問診票」等の作成といった実践的解決策の提案も視野に入れている。解決策には、関係者からのフィードバックを目的とした調査も実施し、より現場の声を反映した解決策を模索したい。本プロジェクトを通じ、①『地域貢献』が成され、更には、②参加学生が、a) 地域の課題と社会調査を習熟し、b) 地域の課題に協働して取り組み、c) 英語の活用もできるという、『グローバル人材』へ育っていくことが期待される。

### 2. プロジェクトの進捗状況について (～H29.10)

#### 1) 予備調査と第一回調査(夏休みまで)

地域外国人の医療ニーズを、行政、学校、医療施設(薬局を含める)の三班に分かれて聞き取り調査をした。結果は第一に、地域定住者と旅行者(滞在2週間未満)は、医療や健康に不安や問題をあまり抱えておらず、情報を必要としていたのは2週間—6か月の長期滞在者であった。第二に、そのような長期滞在者は、a)どこにどの様な医療施設があるかという**情報の不足**、b)その施設の基本情報(時間、対象、取扱う薬品、言語サービス、支払いなど)が**入手困難**という、二つの問題を抱えていた。更に地域全体としてはc)外国人、行政、健康関連の事業者、医療機関の間で、情報と連携が不足しており、外国人が**ドラッグストアも医療機関もたらい回し**されている問題が浮かび上がった。

#### 2) 第二回調査 (10月)

外国人とサービスを提供する日本人にとって具体的な「情報不足」の内容、外国人が「たらい回し」になる原因、「lost in translation」に由来する外国人の「不安」、を明らかにする聞き取り調査を行った。ここで四点の収穫を得た。d)日本の医薬品販売形態とそこにいる人材(i.e.薬剤師の配置と販売員のレベル)が外国人の期待と大きく乖離していることに起因して、業者・施設を「はしご」している問題、e)疾病・怪我の際に、救急を含めてどういう医療施設へ行くかという期待や認識のギャップに起因する不安やlost in translationの問題、f)日本の国民健康保険制度に対する漠然とした不安と提供される説明が分かりにくい問題、g)病院における診察の流れや手順が海外と異なるゆえに起こるlost in translationの問題、e)どの状況が病院マターで、どの状況が薬局マターなのかの認識の違い/lost in translationに起因する施設の「はしご」問題である。

### 3. 今後の取組予定について

#### 1) 第三回調査の準備と実査(11—1月)

季節滞在の外国人向けの医療『手引き』と『ウェブサイト』を作成に向けた調査とその準備を行う予定である。調査目的は、A)各施設に『手引き』のドラフトを見せ、フィードバックをもらうこと、B)外国人に対してアンケートと聞き取りを行い、彼らのニーズの確認を行った上で『ウェブサイト』に載せる追加情報を洗い出すことである。なお『手引き』の掲載内容は、a)医療・健康施設を載せた地図、b)各施設に関する外国人が必要とする情報、c)利用する施設選択のためのチャート、d)病院診察の手順・フローチャート、e)保険制度など医療の仕組みの説明とチャートである。

#### 2) 『手引き』作成と追加調査(1月—3月)

調査結果をもとに、春休み期間中に『手引き』の完成をする計画である。作成途中で確認作業があると思われるため、ゼミ生数人による小規模な追加調査も行う。4月には『手引き』の配布と『ウェブサイト』を公開し、春スキーのシーズンに活用してもらう予定でいる。

# ローカル・ナショナル・グローバル企業群の経営分析

プロジェクト代表者: 篠本 智之

## 1. プロジェクトの目的・概要

北海道をベースにしている企業は同一の業種で全国を対象にしている企業、グローバルに活躍している企業に比べてどのような特徴があるのか。特に成長性、収益性および安全性においていかなる違いがあるのかを分析する。従来、ローカル企業はターゲット市場を成長に応じてリージョナル、ナショナルと広めていく中で競合との差別化を図る一方で、規模の経済を獲得してコストリーダー的な側面を持つようになる。こうした企業の成長・競争はグローバルレベルにまで急速に拡大している。そうした現在、生存しているローカル企業はナショナル企業やグローバル企業とローカル市場では競争しながらも何らかの優位性を維持しながら持続しているのである。本プロジェクトでは同一業種に属するローカル企業、ナショナル企業、グローバル企業として1社ずつ選定し、3業種の企業群を経営分析する。

## 2. プロジェクトの進捗状況について（～H29.10）

今年度後期のゼミ活動として、本プロジェクトを遂行している。10月末段階の進捗状況は次のとおりである。

まず、ゼミ生14名を分析を希望する業種会社名を募り、3グループに分類した。スーパーストア業界、ドラッグストア業界、航空業界である。スーパーストア業界では、アークス、ダイイチ、イオン北海道、イオン、セブンアンドアイ、ウォルマートの6社を分析することにした。ドラッグストア業界では、サツドラ、サンドラッグ、ツルハ、ウエルシア、マツキヨ、ウォルグリーンの6社を分析することにした。航空業界では、エアドゥ、スターフライヤー、全日空、JAL、ユナイテッドの5社を分析することにした。

現在、財務諸表分析を終え、アニュアルレポート、有価証券報告書、雑誌・新聞記事に基づいて、市場分析と組織分析を行っている。

## 3. 今後の取組予定について

今後分析を進め、12月24日に日本大学商学部にて開催される第2回アカウンティング・コンペティションで、プレゼンテーションを行うことになっている。同コンペティションは、全国13大学16学部、21ゼミナール、51グループ、総勢233人が参加して、プレゼンテーションを競うものである。